

# 田面木遺跡現地説明会資料

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

## 1. 遺跡の紹介

本遺跡は馬淵川沿いにある、標高 25～50 m の丘陵地にあります。遺跡は東西約 400m、南北約 800m の広さがあり、市内の遺跡のなかでも規模が大きい遺跡になります。奈良時代・平安時代の集落（ムラ）跡が発見されています。

遺跡内では宅地化が急速に進み、市教育委員会が昭和 62 年（1987 年）以降、開発に伴う発掘調査を断続的に実施しています。今回の調査は長芋作付けによるもので、平成 23 年 4 月 26 日から実施され、今回で 37 地点目となります。主に縄文時代、奈良時代の遺構・遺物が発見されています。

## 2. 今回の調査成果

### 〔遺構〕

縄文時代・・・	溝状土坑	2基
	土坑	1基
奈良時代・・・	竪穴住居跡	7棟
	竪穴遺構	1棟
奈良時代以降・・・	円形周溝	2基
	掘立柱建物跡	2棟
	溝跡	2条

【縄文時代の遺構】 縄文時代の溝状土坑は動物を捕る際に使用された落とし穴と考えられています。丸い形の土坑には底に杭を打ち込んだ痕があり、逆茂木をたてた落とし穴と推定されます。

【奈良時代の遺構】 奈良時代の竪穴住居跡は四角形のものが一般的にみられます。北側にはカマドがつくられ、煙を逃がすための「煙道」が屋外にのびています。

また、竪穴住居跡は大きい住居と小さい住居がすぐ近くに建てられていました。大小 2 棟が 1 つのまとまりとして捉えることができるので、単

に居住していただけでなく、住居を大きさによって使い分けていたなど、いろいろな可能性が考えられます。

円形周溝は遺物が出土しませんでしたがおそらく住居と同じ奈良時代のものであったと推定されます。奈良時代のこのムラでは住居の近くにお墓を営んでいたと考えられます。

### 〔遺物〕

土師器・縄文土器・鉄製品・土製品・石器が出土しています。今回の出土遺物の中で注目されるものは、「関東系土師器」、「穿孔土器」です。

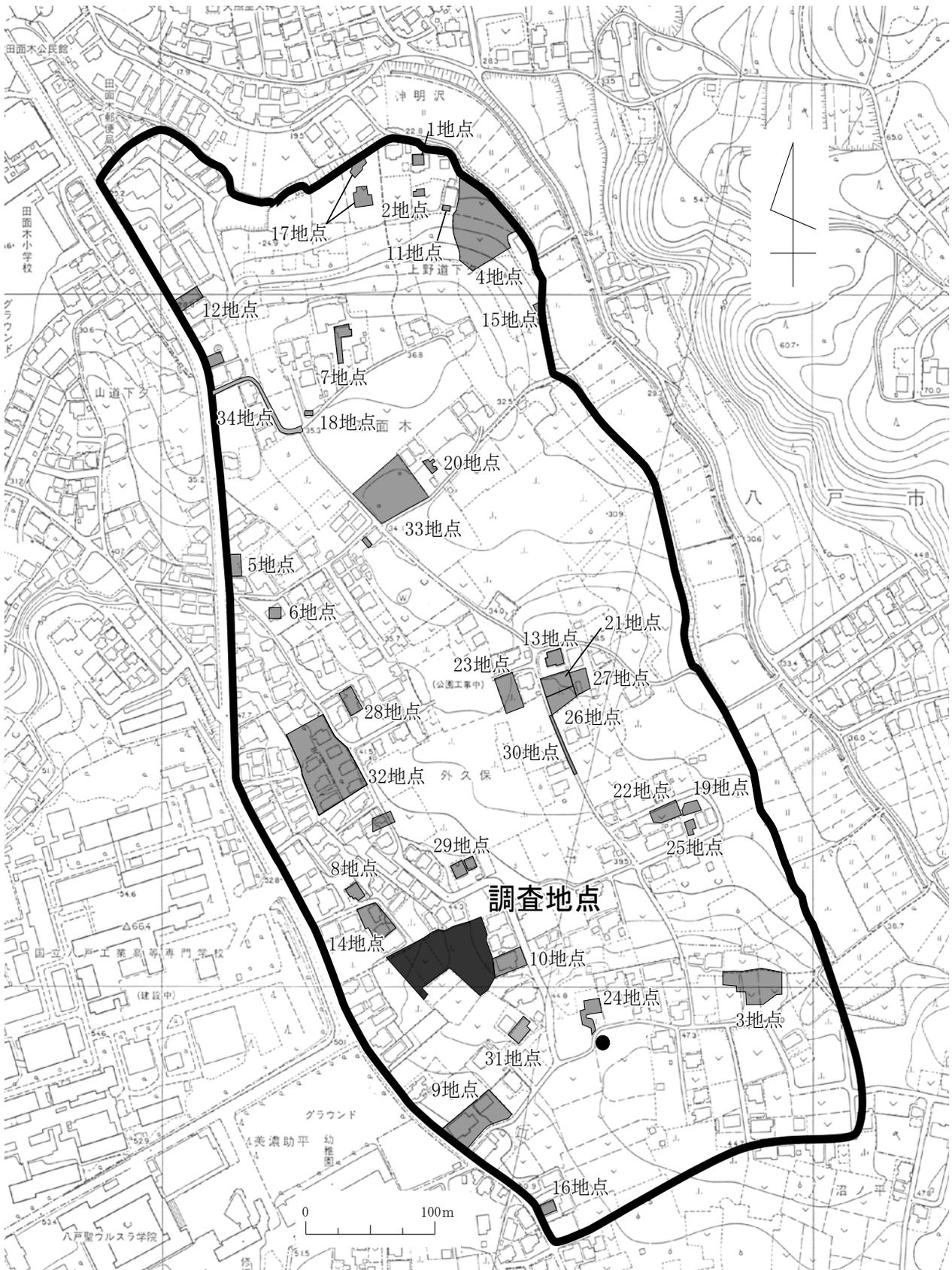
【土師器】 土師器は、弥生土器の流れを汲む、赤色の土器です。古墳時代から平安時代に使用されていました。種類には、甕・坏・高坏・埴・壺・甑などがあります。甕・甑は煮炊き具、坏・高坏・埴は食膳具、壺は貯蔵具といったように、用途に合わせて土器を使い分けていました。

【関東系土師器】 関東地方で出土する土師器の特徴をもつもので、八戸では初めて発見されました。

関東地方などから持ち込まれたか、あるいは土器をまねて八戸でつくったかは今後の課題ですが、奈良時代の八戸と他の地域との交流を考える上で、貴重な発見となりました。

【穿孔土器】 土師器の坏（食膳具）の底部には内側から穴がつけられた跡がみついています。これは調査区東側の竪穴住居跡から出土しましたが、カマドの煙道部分に丁寧に置かれていました。

この土器のように、穿孔された土器は飛鳥時代・奈良時代・平安時代の住居、あるいはお墓などから出土することがしばしばみられます。住居で出土する事例に関しては、住居を離れる際に行なわれた、カマドを中心とする儀礼であった可能性があります。



田面木遺跡 調査地点